

〔「知られざる？！大和文華館コレクション」展によせて〕 珍稀な秀吉像—大和文華館所蔵「秀吉肖像額」について—

当館は戦後間もない1946年に財団法人が設立されました。財団発足時点でコレクションは一点もなく、1960年の開館に至る14年をかけ、作品の収集、調査研究、美術館の立地選定、建物の建設が行われました。開館時には780件収蔵されています。コレクションには台帳番号があり、収蔵順に付されています。中には作品が展示に適さない判断されたものもあります。すなわち、画中の落款に記された作者の作品とは見なされない絵画や、意図的に古く見せようと作られた作品、あるいは、いつの時代に制作されたのか、判断が難しいものもあります。本展覧会の準備に際し、改めてそのような位置づけの絵画作品を見てみたところ、「秀吉肖像額」という名称の興味深い作品（以下、本品と略称します）がありましたので、ここにご紹介します。

本品（図1）は木製で彩色が施された、縦110.4×横74.0cmの大きさの扁額です。画面の大きさは93.4×56.6cm、厚さは8cmです。台帳番号は413で、1949年に購入されたことが記録されています。箱書きなどではなく、伝来を示す手がかりは残念ながら附属しません。本品を見てみると、武将像が大きく描かれ、「伏見様」「御壽像」という文字が篆書体で記され、左脇には「慶長丁酉稔正月吉祥日」とあります。武将像の上部には「五七桐」紋が大きく表されます。武将像に注目すると、口元と顎に髭を蓄え、頬骨の出た顎の

細い顔貌をしており、右手に扇子を持ち、脇差しを挿し、袴を着けています。傍らには太刀が置かれ、上畳に座った姿で表されます。「慶長丁酉稔」すなわち慶長2年（1597）との年号が見られますが、絵画表現からはそこまで遡る作例とは見なされません。小袖に描かれた桐紋の葉数が足りていない点も、写し崩れであることを示します。19世紀、幕末頃の制作でしょう。

それでは像主は誰なのでしょう。「五七桐」紋が強調されていることから、やはり豊臣秀吉が想起されます。「慶長」という元号や「伏見様」という呼称が示すのか疑問ですし、その姿も一般に流布する秀吉のイメージと異なるように思われます。顔立ちも異なりますが、むしろ、衣服や姿勢は「織田信長像」（大徳寺・図2）に近いように思われます。秀吉の肖像は没後間もない慶長年間に描かれた、高台寺（図3）や宇和島伊達文化保存会に所蔵される作例のように、白直衣を着て黒色の唐冠を被った姿が典型的なイメージです。あるいは逸翁美術館所蔵作例（図4）のように、束帯姿に垂櫻の冠を被った姿があります。こちらは秀吉の肖像を制作する際の下絵（紙形）と推定され、画面下端には「これがよくに申よき候」という墨書があり、似ているという判断が記される点でも重要です。両者はともに顎の細い、頬のこけた共

通する顔貌で、秀吉像の特徴が明示されます。

北川央氏は現存する秀吉の肖像画を分類し、系統立てを行っています。秀吉の肖像画が数多く制作された背景に、秀吉は没後、豊国大明神として祀られますが、秀吉ゆかりの地や、息子・秀頼による復興の対象となった寺社に分霊が勧請され、秀頼の自筆神号とともに肖像画や肖像彫刻が祀られました。とりわけ、寺社復興にともなう勧請の場合、豊臣家側が肖像画を制作し、寺社に奉納したようです（北川央「豊臣秀吉像と豊国社」黒田日出男編『肖像画を読む』角川書店、1998年）。したがって本品に表された冠を被らず、袴を着た姿は神としての秀吉ではない、特殊な肖像であることが分かります。

江戸時代に入ると、「長篠合戦図屏風」（大阪城天守閣）・「賤ヶ岳合戦図屏風」（大阪城天守閣）のような戦国合戦図屏風の登場人物の一人として、秀吉も描かれますが、甲冑を着た姿で表され、馬印や画中の色紙型に記された名前でも秀吉と分かります。慶長20年（1615）の大坂夏の陣で豊臣家が滅亡して以降、秀吉像の制作は下火になったようですが、秀吉の二百回忌にあたる寛政9年（1797）に初編が刊行された『絵本太閤記』（作：竹内確斎、挿絵：岡田玉山、版元：勝尾屋）が庶民の人気を博し、歌舞伎や浄瑠璃、講談の題材として人気を集めると、秀吉像が再び数多く描かれるようになります。江戸時代後半の秀吉像に特徴的なのが、秀吉を表すサインとして、桐紋が衣服に表される点です（図5）。

桐紋は本来、天皇家の家紋でし

たが、後醍醐天皇が足利尊氏に与えて以降、天皇が功臣に桐紋を与えることが定着し、足利将軍も倣って臣下に下賜したようです。秀吉は天正14年（1586）に豊臣性を朝廷から賜った際に桐紋を下賜されたと考えられています。『絵本太閤記』では、登場する武将に、それぞれの家を表すサインとして家紋を衣服に描き込みました。その結果、愛読していた子供や女性まで、各武将の家紋と名前を覚えるようになったと、当時の随筆に記されたといひます（北川央「コラム 豊臣秀吉と桐紋」テーマ展『秀吉の貌』図録、大阪城天守閣、2005年）。本品では肩衣だけでなく小袖にも桐紋が表され、こうした時代状況を反映しているものとみられます。

さて、本品の年紀にある慶長2年正月についても詳細は不明です。『大日本史料』によれば、慶長元年12月17日に秀頼が元服する記事が認められますが、そのほかは、二度目の朝鮮出兵にあたる「慶長の役」関連の記載が多く、時期としては穏やかではありません。結局秀吉は翌年8月に病死します。また、扁額という形式も他に類例がありません。江戸時代に各地の寺社に奉納された絵馬が数多く現存しますが、武将像としては、源為朝、牛若丸・弁慶、楠木正成、「富士の巻狩」で知られる仁田四郎などが知られます。本品の位置づけは一筋縄ではないようです。（古川攝一）

※図2・3は『日本美術全集 第10巻』小学館、2013年、図4は『日本の肖像』中央公論社、1978年、図5は『秀吉の貌』図録、大阪城天守閣、2005年より複写致しました。



図1



図2



図3



図4



図5

季刊 美のたより No.206

平成31年 4月 12日

発行 大和文華館